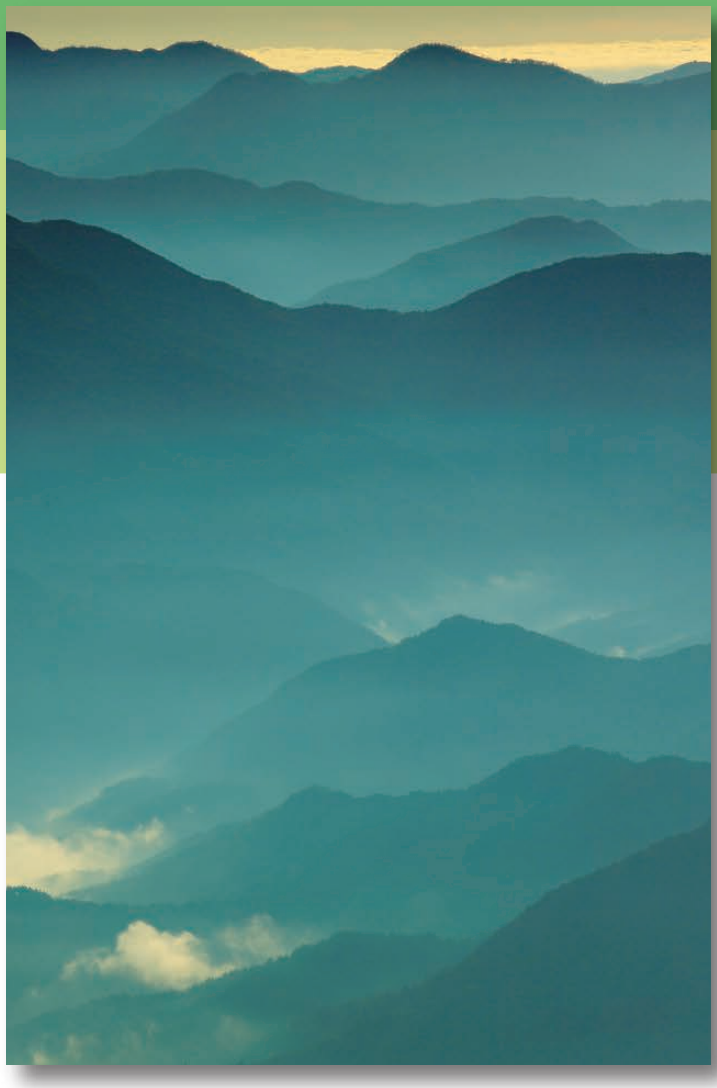
若者たちへの伝言
2023



長野大学社会福祉学部山浦ゼミ

「信州上田学」2023 年度事業

は　じ　め　に

2022年2月に始まったロシアによるウクライナへの侵攻は、未だ終わりが見えず、2023年10月には、パレスチナ解放を目指すハマスのイスラエル人人質問題に端を発した、イスラエル軍によるパレスチナガザ地区への侵攻が始まりました。非難を余儀なくされたパレスチナの人々は、老若男女を問わず、避難場所もなく、病院すらも攻撃対象になっている状況となっています。国際社会は、これらの紛争を止める手立ても見つからない状態となっています。

一方、かつて日清、日露戦争から太平洋戦争にいたる戦争を経験した我が国は、太平洋戦争の終戦から７８年を迎え、戦時下の生活体験者の高齢化が進み体験者から直接当時のようすを聴き取ることが難しくなっています。

昨年、「若者たちへの伝言」を刊行するにあたって、車いすで本学にお越しいただいて貴重な体験を学生たちに語っていただいた宮島満里子さん（当時96歳）が11月に旅立たれたとの訃報に接しました。心よりご冥福をお祈りいたします。

宮島さんは、何度も空襲を受け、東京大空襲も体験されました。

「ある時、住んでいた寮に爆弾が直撃したため、友人と毛布を水で濡らしそれを被って無我夢中で逃げました。帰り道には、丸焦げになった人間の死体がいくつもありました。友人といっしょに、その中を茫然と歩いていました。涙も出ず恐怖も感じない極限状態でした。」

「空襲で住んでいた寮が燃えてしまったため、違う寮で過ごすことになりました。それは、豪華な建物でした。そこにはピアノが置いてあり、友達がショパンの『華麗なる円舞曲』を演奏してくれました。演奏中、空襲警報が鳴っていましたが、みんな庭に出てそのピアノを演奏に聞き入ってしまいました。この時のピアノの音色は、今でも忘れられない思い出です。」

これらのエピソードは、今でしかお聞きできない貴重な証言だったと思います。私たちは、こうした戦時下の日常を記録し、次の世代に語り継ぐことが平和の尊さを感得する上で極めて重要であると考えます。戦争を知らない世代の者たちが、戦時下の日常を生活体験者から直接聴き取ることによって、戦争体験を身近に引き寄せ、自分事としてとらえていく必要があるのではないかと思います。

今年度は、「疎開」をテーマに据え、貴重な体験者の皆様の証言も記録させていただきました。二度と戦争を繰り返さないために、そして、戦争体験を風化させないために、戦時下から現代へたくましく生き抜いた「生き証人」の皆様からの生の声を「次の世代への伝言」として受けとめ、お読みいただければ幸いです。

長野大学　副学長　社会福祉学部専門ゼミ　山浦　和彦

目　次

はじめに …… 01

目　　次 …… 02

第１部　若者たちへの伝言 …… 03
父が体験した召集と出発：上田市から戦地へ（関田芳和さん） …… 04
鎌倉から軽井沢への疎開（倉石文彰さん） …… 06
正しい戦争はありえない（石塚今朝男さん） …… 08
母の手記からたどる父の足跡（山本一清さん） …… 12
上田は苦渋の地だった（中村（宮前）不二江さん） …… 15
八重島の戦争マラリア（山里節子さん） …… 18
今でも残る戦争トラウマ（西山ふさ江さん） …… 20
今年度の活動紹介 …… 24

第２部　太平洋戦時下の上田　～疎開～ …… 25
疎開は、いつ頃なぜはじまったのか。 …… 26
疎開　～ヒト・モノ～ …… 27
1　学童疎開 …… 27
2　工場疎開 …… 29

第３部　活動を振り返って …… 41
これからの平和を築くために（４年 岡田輝） …… 42
一年間の活動を振り返って（４年 高田一吹） …… 43
語り継ぐ責任（４年 柳沢駿太） …… 44
過去から学ぶ、現代を考える、未来へ継ぐ（４年 小谷健人） …… 45
戦争を身近に感じた１年間（３年 上野未来） …… 46
私たちの責任（３年 伊藤果穂） …… 47

編集後記 …… 48

第１部

若者たちへの伝言

父が体験した召集と出発：上田市から戦地へ

基本データ

- 関田芳和さん（72 歳）
  住所／上田市古安曽在住
- 聴き取り日／ 2023 年 5 月 30 日
- キーワード／父と戦争

Q　関田芳和さんのお父さんについてお聴かせください

＜徴兵＞

わたしの父（関田興一）は昭和 15 年 11 月 30 日から武石尋常高等小学校、昭和 16 年 4 月 1 日から中塩田尋常高等小学校で代用教員として勤務しました。当時の日本は徴兵制などにより、教師を含む多くの人々が戦場に駆り出されていました。そのため、上田市でも教員が不足しており、父は、代用教員として学校で働くことが依頼されました。

＜徴兵検査＞

昭和 17 年に、父（当時 21 歳）は上田市の公会堂で徴兵検査を受けました。この検査では身体検査の他に体力検査も行われました。体力検査では 100m 走や 2000m 走、走り幅跳び、米俵（60kg）の運搬などの種目が課されました。その結果によって、父の所属部隊が決まりました。

＜入隊＞

昭和 18 年 4 月 1 日に金澤東部第 55 部隊第二中隊喜田隊へ入隊しました。入営時には現金や歯磨き道具、風呂敷、手帳、鉛筆、切手、封筒、はがきを持参しました。封筒やはがきは家族との連絡手段として重要でした。父は、暗号教育や軽機関銃の訓練を受けながら、故郷を離れて中国へ軍馬 300 頭の輸送任務に向かうことになりました。

＜終戦＞

昭和 19 年 8 月に決第 6671 部隊古川隊へ編入され、千葉県松戸へと移りました。そして、しばらくして静岡県駿東郡富士軍決第 6671 部隊剣隊へと配属替えが行われました。ここで父（当時 23 歳）は昭和 20 年 8 月 15 日の終戦を迎えることになりました。

終戦後、復員。父は、とある物品を持って帰郷しました。物品の中には日の丸寄せ書き旗や弾丸薬莢などがありました。

＜終戦後＞

農業の傍ら東塩田時報の編集を行いました。昭和 21 年 9 月連合司令部により出版法違反の一部表記を指摘されたそうです。「鎮國の神」という表記が天皇を神格化しているため連合司令部は訂正を求めていました。戦

後の日本はアメリカによる厳格な統制が行われていたことが伝わりました。しばらくして、平成 20 年 6 月 11 日恩給欠格者として特別慰労品を政府から受領したそうです。

恩給欠格者とは太平洋戦争を体験したのにも関わらず、軍人としての在職年数が短いなどの理由から恩給を受けられない人のことを指します。

私からの返信

戦争は人の心身を蝕み、生命を否定する悲惨な出来事という認識を持ちました。戦争は私利私欲にまみれた権力者同士の争いであり、多くの犠牲者を出しました。またその争いに巻き込まれた多くの人は家族などの周囲の人びとを守りたいという優しい心を持っていたはずです。しかし「殺さなければ殺される」という異常な思い込みや空気感を戦争がつくりだしました。そのため戦争は人を変えていってしまう部分があると感じます。

今回聴き取りに協力してくれた関田さんも学校で先生をされていました。関田先生がお話をしてくださった通り、戦争は長野大学がある上田市にも迫っていました。上田市にも実際に三度の空襲があり、犠牲者もでています。また、徴兵をされ戦地に向かわれた方々もいます。義務教育の中で習う、東京大空襲や原爆に関する事は日本人として知らなくてはならない出来事です。しかし戦争の被害は身近にも迫っていたことに注意を向けていく必要があると私は考えます。ただでさえ、私たちが戦争について身近に感じる場面というのは減少しているのではないでしょうか。現在太平洋戦争が終結をしてから約 80 年が経過しようとしています。実際に戦争を体験された方々は減少傾向にあり、生の声を聞くことができなくなってきています。大きな出来事ばかりに目を向けて、遠い地の出来事というだけで捉えてしまうだけでは、戦争の負の側面を深く理解することはできないと私は関田先生のお話をお聞きして感じました。

お話にもありましたが、関田興一さんが持ち帰られた寄せ書き旗や弾丸薬莢を実際に見て、触れさせて頂きました。寄せ書き旗に書かれた家族や身近な人々の手で綴られた文字を目にすることで、戦争が誰かにとっての大切な人々の命を奪う非情な出来事であると考えました。また、弾丸薬莢に触れた瞬間、戦場の恐ろしさと緊張感が身を刺すように感じられました。これらの小さな金属片が、戦争において命と引き換えに使われたことを思うと、戦争の残酷さが胸に刻まれました。現在も戦争が実際に起きていることは非常に悲しいことであり、終結後も多くの人びとの心身を苦しめるのではないかと私は考えます。武器を手に取り、いがみ合うのでは無く、対話によって平和な世界を築くために私たちは語り継いでいかなければならないと思います。

（文責　4年　柳沢駿太）

鎌倉から軽井沢への疎開

基本データ

- 倉石文彰さん（84 歳）
- 聴き取り日／ 2023 年 7 月 18 日
- 終戦当時／6歳
- キーワード／疎開

Q　疎開するまでの経緯と当時の倉石さんについて教えてください。

当時小学一年生だった私は神奈川県の鎌倉市で暮らしていました。昭和２０年７月、湘南へ米軍が上陸するとの噂が立ち、鎌倉山から祖父母の住む軽井沢の別荘へ疎開しました。米軍は歴史的文化財のある古都には上陸しないとも聞いていましたが、結核を患った母の暮らせる空気が綺麗な場所を求めていたこともあり、疎開を決断しました。

Q　疎開以前の鎌倉の様子を教えてください。

東京・神奈川へ向かうＢ－29 が鎌倉山の上空を飛び、空襲警報のサイレンが毎晩のように鳴っていました。物資のなかった日本軍は当時、砲弾にアスファルトを詰め込み高射砲弾として撃っていたのですが、それはB-29 に命中しませんでした。その破片だけが家の庭に落ちていたことを覚えています。そして空襲警報が鳴りやむと、横浜、東京方面から花火のような音が聞こえて、空一面真っ赤になっているのが見えました。

Q　疎開先での暮らしはいかがでしたか？最も印象的なことをお話ください。

軽井沢の祖父母の元へ疎開した私は、軽井沢国民学校に入学しました。

地域住民との仲は良好で、いさかいやイジメなどはありませんでした。皆貧しく、お互い貧富の差が少なかったことが仲の良かった理由だと思います。印象的なのは食糧と物資を手に入れるのが困難だったことです。

Q　食糧について印象的なエピソードはありますか？

気温が低い軽井沢では作物を育てることが難しいのですが、それでも祖父は土地を耕し、お米を作ろうとしたことがありました。夏になると穂にはなりましたが、収穫期には実がなることは無かったのでお米の収穫は出来ませんでした。

また、病気がちな母のため、動物性のたんぱく質を取らせてあげようと赤ガエルやヘビなどをよく捕っていました。家族で川魚のマスを育てたこともありました。近隣住民と土地を開墾し柵を張って、そこへマスを放ったんです。マスは順調に育ち、秋ごろになると100匹ほどのマスが20センチ前後にまで成長していました。しかしある朝、父が沼地へ行くとマスが一匹も居ないことに気づきます。100匹ものマスが一晩で居なくなったことから、私たち家族は「誰かが盗んだのではないか」と考えましたが、最後まで犯人はわかりませんでした。父は大いに憤っていましたが、当時は他人のものを盗んでしまうくらい飢えの厳しい時代でした。

Q　物資の確保について印象的なことはありますか？

当時は物資を手に入れる事も困難でした。私は雪靴を調達できなかったため、薄い板上にゴムを載せて作った下駄靴で通っていました。そのため雪の降る寒い日はいつも凍傷のようになっていました。また学校で使う用紙も不足していたので、表面は既に使われた裏紙で代用していました。

私からの返信

今回、倉石さんからお話をお聞きして、今までの疎開についてのイメージが一新されるような感覚がありました。事前に疎開について調べた際、疎開先の住民からいじめ差別などを受けることが多かったと聞いていただけに、近隣住民との仲が良好だったという倉石さんの暮らしぶりは意外に感じました。その中でも、食糧の不足や物資の確保の難しさなど、戦時中の厳しさを改めて感じ取ること場面もありました。

盗まれたマスについてのエピソードの中で、倉石さんは盗んだ人間に対して「他人の物を盗んでしまうほど飢えの厳しい時代だった」と振り返っていたことを記しました。盗んだ人間は誰だったのか、と説明した直後この言葉を発した倉石さんの、どことなく同情的な口ぶりが強く印象に残っています。誰もが生きていくために必死にならざるを得ない戦時中の過酷な環境と、人の心を追い込み、時として非情な手段を強制する戦争の残酷さを肌で感じるようでした。

倉石さんの聞き取りを経てより具体性を持った疎開先での暮らしや戦時中の様子について、お話を聞いた私たちが語り継いで行きたいと感じました。

（文責４年　高田一吹）

正しい戦争はありえない

基本データ

- 石塚今朝男さん（93 歳）
  住所／上田市諏訪形在住
- 聴き取り日／ 2023 年 6 月 20 日
- 終戦当時の仕事等／三菱重工上田工場勤務
- キーワード／戦時下の生活・仕事
  上田市の空襲

Q　学生時代についてお聞かせください。

子ども時代は、現在の清明小学校がある位置にあった尋常小学校に通っていました。私が小学校 5 年生の時に国民学校へと転換したため、その後は国民学校高等科（中央校）へ進みました。しかし、当時の学校は戦争の影響を強く受けていたため、今の皆さんがイメージする様な学校生活を送ることはできませんでした。

≪国民学校での生活≫

国民学校での 1 日は、教育勅語を聴くことから始まります。毎朝、校長先生が全校生徒の前で教育勅語を読み上げ、生徒は終始頭を下げ続けていました。その後は、農作業を中心とした勤労奉仕を行い、女子生徒は挺身隊として工場へ働きに行ったりして、国のために尽くす生活をしていたことを覚えています。授業というものはほとんどなく、国民学校卒業後に進学を考える人はあまりいませんでした。進学先としては、男子には旧制上田中学・小県蚕業学校が、女子生徒は上田高等女学校・実科女学校などがありましがた、男女ともに 10 名程度しか進学しなかったように思います。

≪当時の夢≫

当時の少年たちは兵隊になって戦争に行くことを当然のように望んでいました。中には少年兵に志願していち早く戦地に赴くことを切望する人もいましたね。それだけ、当時の子どもにとって、兵隊というのはかっこいい憧れの存在だったのです。当時の子どもだが、いかに軍事教育の影響を受けて育ったのかということがわかりますね。

また、当時の子どもの進路選択には教師が深く関わっており、生徒は教師の発言には逆らえなかったため、教師が勧めた通りの道に進む傾向もありました。私自身も、満州国の開墾に従事する仕事に就くように言われましたが、体が弱かったことを考慮して再び教師にやめるように言われたことを覚えています。

Q　戦時下での就職についてお聞かせください。

私は、学校を卒業して数カ月の間は就職をせずに、諏訪形で田んぼの手伝いをしていました。本来ならば都会で工場などに就職する所でしたが、東京大空襲が起きたことで就職先が見つからなかったのです。そんな中、昭和 20 年の 5 月頃に、今のアリオがある場所

にあった工場で働く話がきました。その工場というのは、実は、戦火を逃れて疎開してきた三菱重工場だったのです。当時は、工場に関する情報は何も知らされていなかったため、何を作っている場所なのかも分からない状態で、就職を決めてしまいました。その後、工場で働くための研修を受けるように言われ、松本へ行くことになりました。研修は、7月29日までの約3か月間、松本で行われたため、寮生活を送ることになったんです。

Q　松本での寮生活はどのようなものでしたか？

私が暮らしていた寮には同い年と年上の男性が20人ほどいて、毎朝、教育勅語と軍人勅諭を暗唱させられていました。3カ月の寮生活で直面した一番の問題というと、やはり食事と衛生環境の悪さですかね。まず、寮の1日の食事ですが、芋がたったの2本程度しか出されませんでした。その芋も、非常に細くて短い粗末なものだったので、食べ盛りの若者たちにとってこれほど辛いことはありませんでしたよ。私たちは常に極度の空腹に悩まされていて、毎日食べ物のことを考えては町を歩き、口に入れられそうなものはないかと探していましたね。

≪朝鮮人の方が分けてくれた食事≫

食料不足に関することでいうと、今でも鮮明に覚えているエピソードがあります。これは、朝鮮人の方の優しさに触れた思い出です。当時の日本では、朝鮮人は劣った存在だと言われていて、人間として一人前の扱いをされていませんでした。私たちが暮らしていた寮にも朝鮮人の方がいましたが、差別的な風潮はあったように思います。ところが、ある時、朝鮮人の方の温かい人柄に救われる出来事があったのです。それは、荷物の輸送をする運転手として働いていた朝鮮の方に、ご飯とみそ汁を分けてもらったことです。その朝鮮人の方は運転手の仕事をしていて、私を含めた他の日本人よりも食事の待遇が良かったのかもしれません。彼は、粗末な食事を強いられていた日本人の若者をみかねて、隣の部屋へこっそりと呼び出し、ご飯とみそ汁を出してくれました。

最初は、朝鮮人の方が自分たちに親切にしてくれることに戸惑い、ご飯に毒が盛られているのではと疑っていましたが、空腹も限界を迎えていたため、促されるままに食べました。その時食べたご飯の美味しさは、一生忘れられません。朝鮮人という理由で、日本人から不当な扱いを受けていたにも関わらず、貴重な食糧を日本人の若者に分けてくれたこと、とても恩義に感じています。あの方の人柄に、身も心も救われました。

≪寮での衛生環境について≫

他にも、寮生活で困ったことと言えば、衛生環境の悪さですかね。不衛生な環境の中で、寄生虫が問題となっていました。当時は、畑の肥料として人糞を用いていたため、お腹に回虫がいる人が多かったんですよ。そのため、回虫を殺すための海人草という薬を全員が飲まされていました。また、寮生活ではシラミにも困らせられましたね。大量発生したシラミを退治するのが、毎週の恒例行事になっていました。日曜日に外へ全員が集まり、お互いのシラミを取るという異様な光景が、3カ月の寮生活の中で何度も繰り返されました。そして、そんな苛酷な寮生活も何とか終わりを迎えると、7月30日から上田三菱重工場での勤務がいよいよ始まることとなりました。

Q　上田三菱重工での仕事の様子をお聞かせください。

いざ、工場での仕事に身を置いて見ると、とても驚くことがありました。仕事が何もなかったんです。というのも、当時の日本は戦争により非常に苦しい状態であったため、ありとあらゆる物資が不足していました。そのため、工場で何かを作ろうとしても材料が無いので全くやることがなく、朝の朝礼が終わったら暑さをしのぐためにプールに行くという生活を送っていました。ちなみに、当時は工場から給料のようなものは出なかったので、代わりに鍋や物などをもらっていました。

Q　終戦はどのように迎えられましたか？

8月15日に工場近くの木の周りに集められ、玉音放送を聞かされました。それは、天皇陛下の敗戦を告げる言葉でしたが、当時はマイクの調子が悪くて何をいっているのか分からなかったんです。そのため、天皇陛下は、本土決戦に向けて頑張るように言っているのだと仲間たちと勘違いしていましたね。その後、班長から日本が負けたことを説明され、戦争が終わったことを知りました。

Q　上田市の空襲についてお聞かせください。

1994年12月9日の一回目の空襲時、私は電気館で映画鑑賞をしていました。しかし突然映画が停止し、「みんな外に出ろ」との声が掛かり、みんなで急いで建物の外へ避難しました。避難する際に電気館の2階の窓がカーテン越しに真っ赤になっており、何かが落ちてくる様子でした。外に出て上田橋まで避難したとき、空が真っ赤だったのを覚えています。最初はアメリカ軍による空襲であると知らなかったので、綺麗な花火だと思いました。しかし空襲警報が響き渡り、空襲であることを理解しました。

2回目の空襲が起きたのは1945年8月13日の朝です。私は朝食を食べようとしていましたが、大きな音が聞こえ家の外に出ると、頭上に二機の飛行機が光りながら何度か旋回しているのが見えました。私は日本の飛行機だと思い、「かっこいい」と感じました。しかし突然、別所線上空からの機銃掃射で窓がビリビリと音を立て、私は恐怖を感じました。その後その飛行機はアメリカの飛行機だと分かり、その日は会社でもその話で持ち切りでした。

3回目の空襲についてですが、私は一切覚えがありません。上田市では3回目の1945年8月15日の空襲を含め計3回の空襲があったと言われていますが、その日の朝はとても静かで、会社でも誰も空襲の話はしていなかったと思います。とても不思議な事なので、皆さんが是非3回目の空襲について研究していってほしいです。

Q　旧上田飛行場についてお聞かせください。

私はよく友人たちと飛行場に遊びに行っていました。飛行場では特攻隊の訓練を行っていましたが、当時は幼かったため、まさか特攻隊の訓練をしているとは思いもしませんでした。飛行場では格納庫に入ってみたり、飛行機によじ登ってみたり羽が動くのを見たりしていました。「赤とんぼ」という練習機を見たことがありますが、すぐに落とされてしまうのではないかと思うほどのもので、アメリカの飛行機にはとても対抗できないだろうと感じました。また、飛行場には三つ葉が沢山生えていました。家にいたウサギが三つ葉を餌として食べるため、飛行場に行く際にはウサギのために三つ葉を籠いっぱいに摘んで持ち帰っていました。

Q　若者たちへ伝えたいことは何ですか？

正しい戦争はありません。どちらが勝っても負けても犠牲になるのは国民であり、復興までの道のりも図り知れません。戦争は非常に愚かなものです。化学兵器も非常に恐ろしいものです。終戦後も人々を苦しめ続けています。日本の原爆での被害や、ベトナム戦争での枯葉剤の被害など、化学兵器の持つ残酷さは世界中で見られています。これ以上人々を苦しめるために化学の力を使わないようにすることが大切です。

私たちからの返信

これまでの学習から、戦争は人間を変えてしまう恐ろしいものであると理解していましたが、その要因の一つとして教育があったということを強く認識しました。「神国日本」は命を捨ててまで戦うことが当たり前で、戦には負けないという当時の日本国民の考え方に恐怖を感じました。その考え方を浸透させたのは教育であり、一種の宗教のようにも思えました。また、当時の生活をお聞きし、当時は全てが統制された社会であったこと、食べるものが本当になかったこと、働きに行ってもすることがなかったことなど、今との違いに驚きました。戦争体験者はもう２度と兵隊の話をしたくないと仰っている方も多いとお聞きし、その中でも今回大学まで足を運んで私たちに戦当時の体験をお話してくださった石塚さんには感謝したいです。貴重なお話をありがとうございました。

（文責３年　上野未来）

「正しい戦争はありえない」、石塚さんが言われたこの言葉が深く心に刺さりました。今でも世界ではたくさんの争いが起こっており、それぞれにどんな言い分があるのか、どういう理由で武力行使に踏み切ったのかということが、ニュースなどで報道されています。しかし、そもそも戦争を起こしたということに、正義はないのだということを、石塚さんのお話をお聴きして感じました。例えどんな理由があったにしろ、戦争をすれば多くの人が傷つき悲しむことになる、いつも犠牲になるのは罪のない民間人だということを決して忘れてはいけないと思います。もう、二度と戦争を起こさないために、私たち１人１人ができることを見つけ、行動していくことが大切であると考えました。

（文責３年　伊藤果穂）

母の手記からたどる父の足跡

基本データ

- 山本一清さん（74 歳）
  住所／大阪府
- 聴き取り日／ 2023 年 11 月 7 日
- キーワード／特攻隊
  疎開児童

Q　戦争について調査を始めたきっかけを教えてください。

私の母 (山本洋子さん) が残していた戦時下や終戦後の生活についての手記がきっかけです。読み始めてみると膨大な量で、旧仮名遣いで書かれていたため、パソコンに書き起こしながら読み進めていきました。母は上田市内出身で、のちに夫となる私の父（山本琢郎さん）に市内で出会いました。私はその手記の中で、父が「特攻隊の生き残り」であると知り、父について調べていくことにしました。

Q　お父様について教えてください。

父は公務員をしていたため、移動の記録などを詳細に履歴書に記録していました。しかし、その中で戦争に関わる記述はたったの 2 行でした。

【戦争に関わるお父様の履歴】

昭和 18 年 (1943 年) 10 月 1 日　仙台陸軍飛行学校に入校

昭和 20 年 (1945 年) 8 月 15 日　招集解除を命ぜられる

この 2 年間に父に何があったのかに焦点を当てて調べ始めました。初めの手掛かりは、母の手記で見つけた、「特別操縦見習士官」の文字でした。

【特別操縦見習士官とは】

特別操縦見習士官とは、昭和 18（1943）年 7 月に新設された制度であり、高等教育機関を卒業後または在学中に志願して選抜され養成教育をうける者で、「特操」、「学鷲」とも呼ばれました。

日本軍はガダルカナル島での激戦により多くの戦死者を出したこともあり、短期間での操縦士の育成に迫られていました。

少年飛行兵からの教育では追い付かず、海軍で採用されていた大学などの高等教育を受けた者に対して行う飛行科予備学生の制度を参考にして作られました。

特別操縦見習士官の受け入れ校として、仙台陸軍飛行学校がありました。父は恐らくそこに入ったのではないかと思います。調べていくうちに飛行学校の分教場についても分かりました。日本陸軍の軍学校のひとつとして、熊谷陸軍飛行学校がありました。熊谷陸軍飛

行学校には30近くの分教場がありました。仙台陸軍飛行場も、真室川陸軍飛行場も、上田陸軍飛行場もそのひとつです。父は、酔った時に必ず真室川音頭を口ずさんでいました。そのため、真室川分教場（山形県最上郡真室川村）にいたことも推測できました。

Q　飛行訓練について教えてください。

父は約4か月間、飛行訓練を受けました。練習用の二人乗りの飛行機である「赤とんぼ」に乗って、基本訓練から旋回や宙返りなどの操縦法を習得していきます。初めのうちは前に練習生、後ろに教官の2名で乗りますが、ひとりで操縦ができるようになることが訓練の目的でした。飛行学校を卒業するときには、1枚の紙が渡されます。特攻隊への志願について、「希望する・希望しない・熱望する」のどこかに丸をつけ、階級と氏名を記載し、提出します。おそらく、父は「熱望する」に丸をつけて出したのではないかと思います。

Q　特攻隊について教えてください。

と号部隊とは、陸軍の航空機による艦船に対する特別攻撃部隊（特攻隊）であり、「と」とは特攻隊の略号です。当時米空母の能力が向上していたことから、これまでの戦い方では効果はないとの見解でした。そして、「飛行機全体を爆弾にして敵艦に体当たりするのが効果的ではないか」という陸軍上層部による特攻隊の発想が生まれました。そして何より、特攻は戦時下において、国民全体に精神的鼓舞を与えると信じられていました。特攻のための訓練を受けた者であれば確実な戦法だと考えられたそうです。父の部隊（振武隊）は、激戦中に本土決戦のために編成されたのではないかと推測しています。父の部隊である振武隊は、沖縄戦における特攻隊であり、

飛行部隊の総称です。

Q　その後お父様についての調査はどうなりましたか？

私は西往寺へ連絡をして、調査のために出向きました。そこで、特攻隊員たちが滞在した部屋や父が残した名簿などを目にしました。

その中に現住所や略歴の記載を見つけました。

昭和18年（1943年）10月1日　仙台陸軍飛行学校入校
昭和19年（1944年）3月19日　同校退校
昭和20年（1945年）1月　第3練習飛行隊附

この記述から、父は仙台陸軍飛行学校の後に、上田の飛行場あるいは真室川の飛行場に行ったのではないかと思われました。さらに調べていくと、ネットで振武隊編成表を見つけました。第275振武隊の名簿の中に父の名前を見つけたのです。

写真は、山本さん提供 西往寺に残された特攻隊員の絵

【第３練習飛行隊】

第３練習隊は仙台で編成され、南方に行く予定であったが、急遽取り止めになり、仙台を経由して八戸に集められ、八戸で訓練を積みました。その後、出撃準備のため真室川に行ったそうです。

Q　お父様と疎開一家との関わりについて教えてください。

父の部隊は山形県鶴岡市近郊の湯野浜温泉にあるホテルに滞在していたそうです。その時に同じホテルに家族で疎開のため滞在していた方と連絡が取れました。その家族は比較的裕福な一家で、空襲が続く東京を離れて湯野浜温泉に疎開していたそうで、父の部隊との関わりがあったそうです。特攻隊員と疎開一家とのささやかな交流があったのです。

Q　今の私たちに伝えたいことは何ですか？

今はインターネットの時代であり、手軽になんでも調べることができます。今回私の話したような手段もあるため、良ければ参考にしていただき、追求してほしいと思います。

私からの返信

山本さんのお話をお聞きし、当時の制度や特攻隊について深い学びを得ました。また、お母様の手記など貴重な資料をたくさん見せていただき、戦争の時代をよりリアルに感じることができました。また、お母様の手記の中の、「特攻隊の生き残り」という記述から、お父様について調べ上げたということに驚きました。一つのワードから少しずつ派生して調べていくことで結果的に全体を把握できるということが勉強になりました。また、お話の最後には、「疑問は解決できるものだ。足で調べるのが基本だが、今はインターネットという便利なものがあり、情報を得ることができる。無名だが、専門的に調べている人が各地にいることも実感した。」とのお話もいただいた。このお話から、インターネットを手軽に使うことのできる便利な社会にいるということを活かし、追究していく姿勢が大切であると学びました。過去を知るということは今を知ることにもつながると思います。調べたことを伝えていくためにも、調べる手段を多く持っていくことが大切であると痛感しました。今回山本さんにしていただいた方法を今後に役立て、語り継ぐ活動に活かしていきたいと思います。貴重なお話をしていただきありがとうございました。

（文責３年　上野未来）

上田は苦渋の地だった

基本データ

- 中村（旧姓：宮前）不二江さん（89 歳）
  住所／川崎市在住
- 聴き取り日／ 2023 年 11 月 21 日
- 終戦当時の仕事等／小学生
- キーワード／上田市での暮らし
  山洋電気北工場　父の思い

Q　不二江さんの出身・家族構成について教えてください。

私は、出身は東京都です。原宿で生まれて、世田谷で育ちました。父は電気の研究者をしていて、母は教師として働いておりました。兄弟は 6 人いて、小学校 4 年生の頃まで都会暮らしをしていましたね。上田へは、父の仕事が理由で来ることになりました。

Q　不二江さんのお父さんについてお聞かせください。

父は元々、電波に関する研究をしていました。第二次世界大戦が始まる前は、父が研究を発表すると、世界各国から共同研究の問い合わせが来るほどでした。特に、アメリカは父の研究に熱心で、アメリカの博士との仲も良かったです。私たちにお菓子が贈られることもありましたね。しかし、戦争が始まったことで連絡は取れなくなりました。

そして、父の人生に大きな影響を与えた、あのミッドウェー海戦が起こります。この戦いでアメリカ軍に勝利をもたらしたのは、電波の反射を使って目標を探知する兵器、「レーダー」でした。相手の位置を特定し、戦況を大きく変えることができるレーダーですが、実は、その基となる電気の波長の研究を、父もやっていたのです。

しかし、父は「電気の力で生活を豊かにしたい」という思いを抱いて研究をしていたため、自分の技術を戦争に役立てようとは考えていませんでした。軍からは、戦争に役立たない研究をするなと脅されていましたが、父はどうしても自分の技術が戦争に使われるのは我慢できなかったようです。戦争に協力させようとする圧力から逃れるため、軍籍まで抜いてしまいました。

ところが、父が命懸けで戦争に加担することを拒んだ結果、日本は敗北し、多くの命が失われます。おそらく、父はアメリカよりも先にレーダーを開発する技術がありましたが、自分の正義感を貫いてそれを行わなかったんです。そして、皮肉にもアメリカに先をこされてしまい、父は日本敗北の責任を問われることになりました。

Q　上田市へ疎開した経緯についてお聞かせください。

高い技術をもちながら、戦争にそれを活か

そうとしない父は、日本軍に反発する危険人物だと見なされていました。一方で、父の力量も理解していたのか、長野県上田市にあった軍需工場（現在の山洋電気）で責任者として働くよう命じたんです。そのため、私たちは家族みんなで、上田に住むことになりました。それが、昭和19（1944）年8月のことです。それから約2年間、21年の4月まで、秘密警察（特高）に見張られながらの新しい生活が始まりました。

Q　上田市での暮らしはどのようなものでしたか？

当時の生活を振り返ってみると、私にとって上田という場所は、「苦渋の地」でした。何しろ、初めての田舎暮らしだったので、慣れないことが多くて大変でしたね。雑巾がけ1つとっても上手くできなかったし、体も小さくて運動も苦手だったため、皆についていくのが精一杯でした。周囲の子よりも、色んな事が苦手で遅かったため、「のろけつ」と呼んでいじめてくる人もいました。特に、当時通っていた北校（現在の上田市立北小学校）には山洋電気の工場に勤めている家の子が多かったため、突然、会社の責任者になった父とその娘ということで妬まれていた気がします。私たち家族は、会社でも学校でも歓迎されず、面白くない存在として見られていました。

≪食糧不足について≫

上田市での疎開では困ったことがたくさんありましたが、毎回の食事には親も苦労していました。表向きは、父が山洋電気の工場責任者に抜擢された裕福な家だと思われていましたが、実はそんなことは全くなかったんです。父は、国からスパイ疑惑をかけられていたので、常に秘密警察の監視下での生活を強いられ、贅沢なことはできませんでした。未完成の家に引っ越し、土地を開墾して作物をつくり、家族8人を食べさせるために両親は必死でしたね。配給でもらえる米の量が特別多いということもなかったので、米の量が多くなる炊き方の研究をするほどでした。それでも、工夫だけでは満足な食糧を確保できなかったので、兄弟全員のお弁当にご飯を詰めてもらえなかったんです。足りない分は雑炊で補っていたので、私はお弁当を持たせてもらえず、昼休みに家まで帰って食べていました。そんな状況でも、周囲の人には、「お金があるはずなのに何で？」と理解してもらえませんでした。

Q　上田空襲に関して、何か印象に残っている出来事はありますか？

上田空襲を行ったアメリカ兵の飛行機が墜落し、敵のパイロットを捕まえたという事件がありました。その、空襲を行ったパイロットは上田市の地図をもっていて、父が勤めていた山洋電気の工場にも印がつけられていたんです。当時の山洋電気の工場は、北工場と南工場の2か所に分かれていましたが、空襲対策として1つにまとめて郊外へ移動することとなりました。また、上田が再び狙われることを考え、通っていた北小学校の校舎を黒く塗るという対策も取りましたね。白い校舎にすすを塗ることで、目立たないようにしました。

Q　終戦に関して印象的なエピソードはありますか？

終戦の頃になると、2年間暮らした上田の地を放棄し、母に連れられて高崎へ向かうことになりました。当時、親戚の家が高崎にあったので、そこを頼ろうとしたんです。ところ

が、いざ高崎に着いて見ると、そこは決して快適な場所ではありませんでした。道路のアスファルトは溶け出していて、空気はやけどしそうなほど熱く、戦争の被害が色濃く表れていました。前を向いて歩こうにも、反射した光が目に飛び込んできて、目が開けられないほど眩しいんです。母は、苦しい状況に泣き言をいう子どもたちの手を引き、「もうこれ以上辛い思いはさせない」と励ましていました。その時は、母の言葉が信じられず、これからもっと大変な目に合うのではと疑うような気持もありましたね。しかし、後からあの時の母の言葉は本気だったということが分かりました。なぜならば、両親は既に死を覚悟していて、父は母に青酸カリを渡していたんです。この先どうなるか分からないので、何かあれば苦しむ前にこれを使おうと考えていたみたいです。

Q　若者たちへ伝えたいことはありますか？

戦争によって刻まれた心の傷は、どれだけ時が流れても決して癒えません。私の父は亡くなる間際になると、「俺は生きていけはいけない人間なんだ」と心を乱すようになりました。父は、科学の力を人々の幸せのために使うという選択をしたことで、多くの命が失われたことを、長年背負って生きてきたのだと思います。それまで、家族に胸の内を語ることはなかったけれど、死の床で「多くの人を殺した自分が、このような所で楽になるわけにはいかない」ともがく父を見て、やりきれない気持ちを１人で抱え続けていたことが分かりました。戦後何十年経っても、心の奥底にある苦悩は消えないという事実を目の当たりにしたからこそ、死ぬ瞬間まで人々を痛め続ける戦争の恐ろしさについて、多くの人に知ってもらいたいですね。

私からの返信

上田市での疎開生活は、不二江さんにとって辛いものだったという話をお聴きし、疎開したからといって心身の無事が保証されるわけではないことを改めて感じました。学校の歴史の授業で習う疎開は、戦火を逃れるために被害の少ない田舎で暮らすことといった程度でしか扱われないこともあるので、疎開の大変さのイメージが付きにくい人は多いと感じます。疎開の真実を知った私たちが、今後は社会に向けて学んだ内容を発信していきたいです。

また、不二江さんが語ってくださったお父様の生きざまにも、強く胸を打たれました。幼い不二江さんが夜のトイレを怖がった際に、人が通るとそれを感知してライトがつく仕組みを作ってくれたというエピソードには、お父さんの人間性がよく表れていると感じます。自分の持つ力は、人を殺す兵器開発のためにあるのではなく、誰かを笑顔にするためにあるのだという考えをもった、素晴らしい方でした。当時の環境下において、例え自分の立場が悪くなったとしても意思を貫く姿勢には、尊敬の念を抱きます。

しかし、悲しいことに、お父さんの正義は当時の時代では受け入れられず、長年苦しまれていた事実に胸が痛みます。自分の考えをもって行動できる人が、尊重される社会でなければいけないと感じました。誰よりも強く優しかった不二江さんのお父さんのように、私も人の喜びのために努力できる人になりたいです。

（文責３年　伊藤果穂）

八重島の戦争マラリア

基本データ

- 山里節子さん（86 歳）　写真は山里さん提供
  住所／沖縄県石垣島
- 聴き取り日／ 2023 年 8 月 9 日
- 終戦当時の仕事等／小学生
- キーワード／沖縄戦　疎開
  戦争マラリア

Q　疎開に至った経緯を教えてください。

空襲が激しくなった昭和 20 年 6 月、私が通っていた小学校は丸ごと軍部に占領されて、民間の仮教室で勉強するようになりました。仮教室は家のような場所でした。戦争が激しさを増すにつれて学校の先生から、当時日本の支配下にあった台湾に疎開するよう告げられました。ある日、家に帰ると両親が疎開に向けた荷造りをしていました。しかし台湾への疎開の 2 日前、戦争がさらに激しさを増したため、台湾への疎開は取りやめとなり、島内の山中へ強制疎開することになりました。私はこの山中をとても気に入りました。

Q　疎開が告げられたときどう思いましたか？

私は疎開を告げられたとき、「疎開」という言葉の意味を知りませんでした。学校の先生になぜ疎開するのか質問すると、「戦争が酷くなってきて危ないから、安全な場所に行くのです」と言われました。私は台湾にいとこがおり、いとこに会えることを楽しみにしていたので、取りやめになったことは残念に思いました。

Q　疎開中の出来事について教えてください。

疎開先では掘っ立て小屋のような長屋が建てられ、そこで 10 世帯くらいが生活していました。何を食べていたのか思い出せないほど常に食べるものに困っていましたが、祖母と一緒に山を散策しては山菜などを採っていたことは覚えています。お米にありつけたのは数か月で 1 、2 度だったと思います。島内の山中へ疎開していたのはごく短く、一週間ほどでした。長屋の近くに爆弾が落下し、長屋が吹き飛ばされてしまったからです。この出来事をきっかけに、私たち家族は八重山に疎開することになりました。

Q　疎開中に特に辛かったことについて教えてください。

ハマダラカ※1 の生息する八重山に移住させられたため、多くの人がマラリアに罹患し、死にました。八重山は戦前からハマダラカが生息する「ヤキーヌ島」※2 と恐れられていました。疎開した森の中では私含め家族全員が感染し、母と祖父は亡くなってしまいました。他の疎開した人々も同じように苦しんでいました。私の家族は、兄は予科練の試験で奄美大島へ向かう途中に米軍の攻撃により、生後 4 か月の妹は栄養失調により亡くなりました。

※ 1 ハマダラカは、マラリアを媒介する蚊こと。
※ 2 ヤキーヌは、焼けるように熱い。ヤキーは、沖縄の方言でマラリアのことを指す。

家族の半分が戦争のせいで亡くなったのです。戦争がなければ亡くなりませんでしたが、幼い時期の私には何もできませんでした。

Q　マラリアについて教えてください。

戦時中の沖縄では、マラリアによる死者は空爆による死者の 20 倍ほどで、最も犠牲者を出しました。マラリアに感染すると高熱が出て、骨の髄から寒さを感じました。脾臓が腫れて、栄養失調で痩せていてもおなかがぱんぱんに膨らみました。当時マラリア治療の薬はありましたが、軍の上層部の人しか手に入れることができませんでした。そのため、私がマラリアに感染したときは祖母が薬草で凌いでくれました。

Q　私たちに伝えたいことを教えてください。

石垣島は小さな島ですが、山や川などの自然が豊かで、今まで幸せに暮らして来れました。国は、「軍事的に空白だから」という文句で軍事基地を作ります。基地の島になることで、自然が失われてしまいます。島の恵みが壊されることは許せないです。島は私の地球だと思っているので、守りたいです。もし次に戦争が始まれば敵味方関係なく全員が敗者です。最も被害を受けるのは一般市民であり、お年寄りや子供たち、女性の犠牲も大きいです。これからも巻き込まれることのないように、若い方たちに抵抗意識を持ち続けてほしい。

オンラインで開催しました

私からの返信

山里さんのお話をお聞きし、沖縄戦の悲惨さは戦いの場にとどまらないことがよく分かりました。自然豊かな美しい島で多くの犠牲を出した「戦争マラリア」について、私は今まで全く知りませんでした。未だに知る人が少ない事実でもあると思います。「国は国民を守ってくれなかった」という山里さんの言葉もあったように、米軍ではなく、味方であったはずの日本軍によって強制疎開された先の犠牲であるという事実を知り、衝撃を受けました。戦争マラリアの話をお聞きして、多くの体験者の方が話される、「戦争が起これば犠牲になるのは国民である」という言葉の意味を痛感しました。山里さんのご家族も、半分が戦争のせいで亡くなったとお聞きし、心が痛みました。当時は戦争で命を奪われてしまうことがどこか当たり前かのような風潮があったのではないかと感じました。国からは「鬼畜米英」という言葉を信じ込まされており、敵味方関係なく戦争に賛成したり、引き起こしたりする考えが根付いてしまったとのお話もありました。この歴史から得た教訓を胸に刻み、同じ過ちを犯さないようにしていきたいです。戦争体験者の方から直接お話を聞くことのできた私たちの世代が、これからの世代にも引き継いでいかなければならないと思います。辛い過去であるにも関わらず、貴重なお話を聴かせていただいたこと感謝申し上げます。

（文責 3 年　上野未来）

今でも残る戦争トラウマ

基本データ

- 西山ふさ江さん（102 歳）
  住所／上田市上田原在住
- 聴き取り日／ 2023 年 10 月 25 日
- 終戦当時の仕事等／専売局　たばこ屋
- キーワード／配給
  上野駅

Q　終戦当時はどこで何をされていましたか?

終戦したときはもう上田の実家に戻っていました。

戦時中は、東京の墨田区に住んでいました。東京大空襲も東京で体験することになりました。東京大空襲は 3 月にありましたが、12 月か 1 月にはもうかなり焼けていました。

それもあって、上田の実家に戻ることになったんです。当時の情報はほとんどラジオからでした。それを頼りに何とか上野駅から電車に乗ろうとすると駅はもう、ほとんど正常な機能していませんでした。駅員さんからは「自分たちの思う方に逃げていい、金はいらないよ」と言われました。

Q　当時の食事について教えてください。

一人、一日一食が食べられるギリギリでした。当時は配給所という場所が所々にあって、そこに切符を持っていくと食べ物と切符を交換できたんです。

一人お茶碗一杯分の米をもらいました。お米も最初だけでだんだん具も何もないおじやになってしまいました。どうしても食べるものに困ると新小岩や千葉の松戸まで買い物をしに行きました。

それでも、当時は「贅沢は禁止」だったので、各駅に監視がいて、監視に見つかると持っているイモ類や野菜などの食べ物を取られてしまうんです。

それが嫌で、どうにかして隠しながら買ったものやもらったものを持って帰りました。

買い物だけじゃなくて、荒川の土手に野菜をとりに行くこともありました。しかし、土手に行くと勝手に柵が置かれて、みんな自分の土地にしていたんです。しょうがないから農家に頼んで、食べるものをもらおうとしましたが、ここでも監視に見つかるとダメだからと言われてなかなかもらうことはできませんでした。

当時の食生活は本当に苦しかったですよ。

Q　当時の衣類などについて教えてください。

今みたいに、毎日洗濯をして、色々な服に着替えるなんてことはできませんでした。お湯を沸かして、一日着た服を絞って濡れている状態で着る。そんな毎日でした。セータのような服にはシラミがそこら中に付いていて、それを服から取るのも毎回一苦労でした。

Q　当時の避難方法や訓練などについて教えてください

空襲警報が鳴るとまずは防空壕の入ろうとします。しかし、東京には田舎のような斜面に穴を掘ってそこに入るといった防空壕の形ではなく、家の縁の下が防空壕のような役割を果たしていて、そこに一斉にみんなで駆け込んでいきました。

訓練もたくさんしました。火消しの訓練としてバケツリレーなどをたくさんしました。訓練を監督する大隊長は消せばいいって言うけど、火の威力はそんなもんじゃなかったです。

竹槍の訓練もたくさんしました。戦闘機から落ちてきたアメリカの兵士を刺せるようにとのことでしたが、とても私にはできるわけないと思いながら訓練をしていました。

毎日訓練をしていましたが、この訓練が本番で生きるようなことはほとんどありませんでした。

Q　お父さんの出兵について教えてください

父の召集令状が届き、上田駅まで見送りに行ったことを今でも覚えています。

父を見送るとき、当時はもう二度と会えなくなるようなものだから悲しいはずなのですが、全く悲しいという気持ちはなかったです。今思えばとても不思議な気持ちでした。

父はその後、仙台の飛行場に特攻隊員として行きました。

特攻隊員は毎日、御馳走が食べられたそうです。その後、特攻の日を待ってたそうなんですが、特攻用の飛行機がなくなり、出撃することなく実家に帰ってくることになったんです。

父が実家に帰ってくると母はそれを必死に隠そうとしました。近所の人からは戦争から逃げて帰ってきたとたくさんの悪口を言われたんです。本当は帰れという命令で帰ってきたのに世間はそれを信じることなく非難し続けました。

その後、玉音放送で敗戦が伝えられると、近所の人が父に謝りに来ましたよ。

Q　東京から上田に戻ってくるまでにはどのようなことがありましたか。

どこでもいいから逃げろとの通知がありましたから、上野駅から上田へ戻ってきました。私たちが上田に戻ろうと上野駅に行ったとき、突然空襲警報が鳴ったんです。それも「上野駅近く！」と。みんなが改札口から出ようとして、後ろからどんどん人が押してくるんです。そして、目の前にいたはずの母子の姿が見えなくなりました。後ろからどんどん押されますから、立ち止まるわけにはいきませんよ。そして私は直接確認したわけでもないのですが、足の感覚では子どもを踏んでしまったような感じがしました。

一緒に上田に戻ろうとしたおじさんも転んでしまい。リュックも水筒もなくなって、もうそこからの記憶はなくなってしまいました。

父も一緒のはずなのに、連れていたことすら忘れていました。

途方に暮れていると、ある見知らぬおじさんから「どこへ行くんだ」と声をかけられました。

私は「信越線」と答えると「連れてってやる」と言われ、何とか電車乗り場までたどり着くことができました。

その電車は屋根にも人が乗っていて、とても子どもを連れた私がのれるような状況ではなかったので、どうか子どもだけでもと思い、窓から子どもを乗せましたが、あまりに子どもが泣きますから、かわいそうに思った乗客の皆さんがなんとかスペースを作ってくださ

り、電車に乗ることができました。屋根の上に乗っていた人のほとんどは碓氷峠で落とされてしまったそうです。

大屋まで来て、そこで初めてやっと「生きてる」という実感が湧きました。電車を降りて、雪が降って寒かったですが、そんなことよりも嬉しい、「助かった、助かった」と何度も思いました。

上田に戻って、すぐ鞄の中を見てみると、中に入っていた袋が溶けているのが分かりました。そこで思い出したんです。父から青酸カリを渡されていたことを。何かあったときにどうしても辛いことがあったときにこれを飲むように言われていたんです。今じゃ考えられませんが、当時はそれくらい死と隣り合わせの状況でした。

Q　終戦の知らせはどこでどのように知ったのか。知ったときどう感じましたか？

家の庭でラジオの前にゴザを敷いて聞きました。

ついに負けてしまったのかと思いました。その後、進駐軍が上田にも来て布団やチョコレートをくれました。お父さんからは何が入ってるか分からないから絶対に食べるなと言われていましたし、戦争に負けたということから憎んでいたのですが、チョコレートのようなお菓子を食べたことはほとんどありませんからチョコレートを貰えた時は、憎んでいても嬉しかったです。

Q　今の私たちに伝えたいことは何ですか？

戦争を語る側の私にとって、今いつ何が起きるかは分かりません。戦争は本当に嫌だね。子どもが犠牲になるから。

今は平和でいいかもしれません。これから色々なことが起こるかもしれない。だからこそ、若い人たちが戦争の話を聞いてくれることが嬉しいです。

Q この写真の犬はなんですか？

昔飼っていたマルチーズです。品評会で賞をもらっていたんですが、戦争が激しくなると動物はすべて殺処分することになっていましたから、本当にかわいそうでしたが殺処分することになりました。

私からの返信

西山さんのお話を聞く中で、改めて戦時下の暮らしの大変さを感じることができました。

そして、今の私たちの生活がどれだけ平和なのか。平凡な日常がどれだけ大切なものなのかに気付くことができました。

おなかが空けば、お店に行って好きなものを食べる。欲しい服があれば、買いに行く。そんな当たり前の毎日ができない戦時下の暮らしとはどのようなものなのかをお話を聞く中で、改めて考えることができました。

着るものもなければ、食べるものもない、そのような日常を現代に生きる私たちは体験することもできないと思います。

しかし、お話を聞くことを通して、当時の状況を考え、自分事として捉えることは今でもできます。今回のお話についてこの冊子を取り、今これを読んでいるすべての人に戦争とは何か、戦争を繰り返すことがあってもよいのかを考えてほしいと思います。

国民全員が巻き込まれ、小さな命まで奪われる状況を知る。知ることからこれからの平和とは何かを考える。このような当たり前のことを若い人たち全員でできるような世の中を作っていく必要があると感じました。

（文責４年　岡田 輝）

今年度の活動紹介

◆年度初めに、市内にある戦争遺跡を上田西高校の皆さんと訪ね、フィールドワークを行いました。

◆聴き取り調査（5月～11月）

今回も多くの方から、お話しをうかがいました。

聴き取り調査に、ご協力いただいた皆様に御礼申し上げます。

写真は、10月25日の中村（旧姓：宮前）不二江さんの聴き取り時に撮影。

◆沖縄と長野を結んで平和を語るオンライン交流会に参加（11月4日）

主催：沖縄県子ども生活福祉部
　　女性力・平和推進課
共催：長野県地域福祉課

山浦ゼミから、聴き取り調査や戦争遺跡調査について報告しました。

◆原稿執筆・活動まとめ（11月～1月）

◆関連情報

昨年度発行した『若者たちへの伝言』はこちらからお読みいただけます。

上田市の取り組み

第２部

太平洋戦時下の上田
～疎開～

疎開は、いつ頃なぜはじまったのか。

この本を手に取った皆さんは、「疎開」とは何かについて、その大まかな内容については知っていると思います。

ここでは、改めて疎開とは何かについて見ていきましょう。

戦時下の疎開とは、戦争が起きたときに危険な地域から人々や工場、企業などを非難させることを指します。疎開は、決して人だけでなく、工場や企業も行っていたのです。

戦時下においては、敵からの爆撃などによる被害や危険が常に存在し、生活や安全が脅かされる可能性が非常に高いです。だからこそ、主に都市部に含まれる地域に住む人々や工場などが政府や自治体の指示に従い、安全な場所に移動させられます。これが疎開です。この政府や自治体の指示以外にも、親戚の人を頼って田舎に行く、縁故疎開と呼ばれるものもあります。

疎開先として選ばれる地域は主に、戦闘や攻撃から比較的安全な地域です。これには、田舎や農村地域、山間部や海岸部などが多く含まれます。疎開先には子どもたちだけで行く場合や家族全員で疎開する場合など、人によって疎開の方法や手段はそれぞれです。戦争の終結や都市の復興などの条件が整った後に元の地域に戻ることもあれば、そのまま疎開先の地域で暮らす場合もあります。疎開は、戦時下において人々の生活を維持し、被害を最小限に抑えるための対策として必要不可欠なものなのです。

このような疎開が初めて行われたのが1944年、連合国軍による本土空襲が始まった直後の1944年8月4日に、東京都から学童疎開第一陣が出発し、その後沖縄や大阪などから戦争の被害が激しい地域を中心に疎開が9月末までに集中的に行われることになりました。

しかしながら、疎開先の暮らしは決して豊かなものであるとは言えません。親元を離れて暮らさなければならない子どもたちや、疎開先の地域や学校に馴染むことができず、いじめられてしまう子どもたちなど、疎開先の暮らしは戦禍からは逃れることができたかもしれませんが、人間関係などに悩まされることもあるのでした。

食事や衣服、住む場所、すべてにおいて自由はほとんどなく、苦しい生活を強いられていたのが現実です。

この第2部では、戦時下の上田市の疎開について見ていきましょう。

疎開　～ヒト・モノ～

1　学童疎開

空襲が激化した 1944 年の夏頃から、学童疎開は行われました。全国の小学 3 年生～ 6 年生の 100 万人以上を対象として行われた疎開には、親類を頼る「縁故疎開」と学校単位の「集団疎開」があり、合計 70 万人ほどの児童が地方へと避難しました。集団疎開した子どもたちは、学校ごとに温泉旅館やお寺の本堂で集団生活を送りました。

疎開先の候補となる地域は首都圏から比較的近く、安全な地域が選ばれました。長野県は四方を山に囲まれているため空襲などの危険が少ないと考えられ、多くの疎開児童が身を寄せました。実際、東京からの疎開者数が最も多いのは長野（3.7 万人）であり、次点が福島、群馬、静岡（2.7 ～ 2.8 万人）です。疎開の目的として「国策として行われたこの疎開は、戦争のために次世代の兵士を温存するという目的があったとされる。」と指摘されています。（昭和 19 年学童集団疎開記録 p 80 抜粋）集団疎開には食費（1 人当たり当時 10 円、月収の 15 ～ 20％程度）と布団など日用品の負担が求められました。これらの費用が捻出できなかったり、両親が疎開に反対したりして疎開を行わない児童も 33 万人程いました。また、病気などを理由に疎開に適さないと判断された児童も一定数いたとされています。大都市での空襲が激しくなると国は強制的といっても良いほどに都内の子どもを疎開させました。

上田・小県には 4197 人の児童が疎開しており、その中でも別所温泉が 1351 人ともっとも多くの児童を受け入れました。別所村では東京都杉並区の杉並第五国民学校、若杉国民学校、桃井第二国民学校（1944 年 8 月 14 日から学童疎開開始）、西田国民学校、立教女学院付属初等学校の 5 つの学校から疎開児童を受け入れました。東京から疎開地の別所へ発送された子どもの荷物 2237 個、学校用の荷物 584 個は疎開専用の列車、上田駅経由で別所駅に到着し、駅から各宿屋まで運ばれました。8 月 25 日、立教女学院の子どもたちは疎開列車で上野駅を出発、上田に午後二時半頃に到着、上田電鉄に乗り換えて四時には別所駅に到着しました。

食糧などは国から配給される仕組みになっていましたが、支給される基本量はとても少ないものでした。その上、昭和二十年になると一年の間に二回も供給量が削減され、食糧のやりくりに大人達はとても苦しんだといいます。年を経るにつれ供給される食糧の内容も変わっていき、主食としてあった米が次第に麦、大豆、コーリャン、芋とカボチャに変化していきました。

基本量が少ない上に供給される内容も質素になっていきましたが、疎開した子供達を預かる大人達は食事に対して様々な工夫をしていたといいます。その一つが内臓肉のカレーライスです。上田のと畜場では殺された牛、馬、豚の内臓は肥料として処分していたのですが、倉沢桂吾さんがそれらの内臓は食用可能であることに気づき、別所村で買い付けたことがわかっています。それからは天神町のと畜場から別所村まで運びこみ、豚や牛の内

臓を共同炊飯所に配っていたそうです。内臓肉はカレーに入れられることがあった様で、肉が一切れ入っていたと子供達は喜んだそうです。

実際に上田市別所温泉に疎開された目沢民雄さんのお話（長野県民 100 年史 4　太平洋戦争と長野県民より引用）

昭和十九年の冬、ぼくは上田市近郊の別所温泉にいた。東京杉並区若杉国民学校の集団疎開組の一員で五年生だった。

冬の別所温泉は寒い。規則を破って夜中に宿舎の温泉に入ると、渡り廊下を通って部屋に戻るまでに手拭いが凍ってしまう。

朝、起きぬけにはだかで外に集まり、乾布摩擦をしてからマラソンをする。寒いとか冷たいという感覚ではない。爪の間や鼻や耳は痛いばっかり、胴体や腕や脚は熱くてしびれている。身体全体がじんじんじんじん沸騰している。そんな時に皇居遙拝があると、心底から「撃ちてし止まむ」という気分になったものだ。

昼間でも空気は冷たいが、ぼくたちは廊下の日溜りに集まって、シャツを脱ぎ、はだかになって、しらみをとった。しらみは、シャツの縫い目にびっしりと並んでいる。ガラス戸のレールの間にしらみを置くと、”急降下爆撃”と称して、レンズで太陽の光を集める。

やがて、しらみはプツンと音をたて、ちょっとはねて腹を破る。「轟沈！」とぼくらは叫ぶ。何匹も何匹も並べたしらみを、一匹ずつ時間をかけて、ぼくらは轟沈”させていく。それは、戦争が教えてくれた、ぼくらの”禁じられぬ遊び”であった。

別所温泉花屋旅館には七カ月いて、翌年の春、ぼくは六年生になり、新しく編成された疎開組に入って、塩田平の鈴子公民館に移動した。
鈴子の生活は、労働のあけくれだった。

ぼくらは毎日近くの農家からや肥桶を借り、桑の根を掘り起こして畑にし、畝をきざんでソバや、キビや、大根の種を播いた。小学校の校庭を借りてさつま芋の苗を植えた。これらは、夏から秋にぼくらの大切な食糧となった。ヤギとニワトリとウサギを飼った。草刈りやサワガニ採りは日課だった。たえず空腹に悩まされ、多分慢性の栄養不良だったぼくらの栄養補給に、幾分か役に立っていたにちがいない。こうした生産労働を中心とした生活は、必要に迫られたからでもあったろう。勉強をした記憶はほとんどないが、ここでの労働の経験はぼくの血肉となって、今日まで四十年のぼくを支えてくれている。八月の敗戦から三カ月後、畑でとれたさつま芋や、村の人々からいただいた柿やくるみをおみやげに、焦土の東京に帰った。

※参考資料・文献

・昭和 19 年学童集団疎開記録 p80
・上田市民のくらしと戦争
・長野県民 100 年史 4　太平洋戦争と長野県民　郷土出版社 p105

2　工場疎開
―上田へ疎開してきた主な事業所―

1929年（昭和4年）アメリカで株価の大暴落が発生し、それをきっかけに世界恐慌が起こりました。その影響から昭和恐慌に陥り、失業者が増大していきました。農村では農作物の価格の暴落とともに都市部の就職していた人々が戻ったことによって人口増加となっていきました。その結果農村部では農家の暮らしが苦しくなっていました。

上田はかつて製糸業がさかんでしたが、昭和の大恐慌によって笠原製糸を除く工場は衰退してしまいました。上田にとって産業の振興と失業者対策は大きな課題となっていました。

この当時の様子を「上田小県誌　社会編」では次のように述べています。

「養蚕、蚕種業によって栄え膨張した上田市は昭和恐慌の打撃は大きく、繭糸業者の他業に転換するもの多く（味噌など）また、繭糸の転用工業（靴下製造など）市としては、市勢挽回の意図のもとに県下の先端を切って、上田飛行場の建設に乗り出し、失業救済事業で飛行場の整備をした。やがて、満州事変が発展して戦時体制に入るといち早く、陸軍省に献納して所沢の飛行学校上田学校がおかれた。また、南天神町方面河原であった所に鐘紡の従業員2000名という大工場を誘致した。戦争が激烈になると、蚕種、繭糸製造の整理がされて軍需工場となるもの多く、 ― 中略 ―　京浜からも軍需工場が疎開してきた。」

このように上田市は、1931年3月に国の補助を受けながら土地を開墾していきました。農業ができる土地を増やして市民の生活を守ろうとしたのです。しかしながら、この土地は痩せていて農業には向かないことが開墾中にわかってきました。そこで、当時必要とされることが多かった飛行場を現上田千曲高等学校の場所につくることにしたのでした。

また、工場誘致や従業員の確保を積極的にすすめたため上田は県内有数の軍需工場集積地となっていきました。

1944年7月にサイパン島の日本軍が陥落します。アメリカ軍はここを基地にして日本本土へ本格的な空襲を始めました。12月には、名古屋の三菱重工業第五製作所が爆撃を受け全滅に近い被害を受けてしまいました。そこで陸軍は、空襲に耐えられる工場を地下に移転させる計画を立てたのです。上田が最適地に選ばれ、上田飛行場周辺地に地下工場の建設も始められたのでした。

また、「上田商工会議所100年史」によると疎開工場について次のように述べています。

「米軍による日本本土の空襲があり得ることが実証されたので、これを機に軍需工場の地方移転が始まった。とくに長野県は山国で防空的には有利だと考えられ、工場疎開の好適地とされた。県下に疎開してきた主な軍需工場は1942年末（昭和17年）43、1943年（昭和18年）73、1944年（昭和19年）8月112である。その多くは航空機関係工場であった。1945年（昭和20年）8月敗戦時の調査によると、軍需工場数約1500、従業員21万5000人である。ただし、半数近くの工場は資材、労力不足で休業状態だった。 ― 中略 ―　数年まえ、鐘紡工場の招致に力をつくしその成功に喜んだことは夢のようである。鐘紡工場は、1943年（昭和18年）秋に生産をほとんど中止、三菱重工業上田工場へと変わった。

このとき、上田市およびその周辺に疎開ないし新設された工場は枚挙にいとまがないぐらい多かった。これらの工場のうちには終戦後、上田を去ったものもあった（三菱重工業など）が、そのまま根を下ろして上田市の工業都市化に貢献したものも少なくない（日本無線など）。－以下略－

上述のように不況、失業対策からの工場誘致や戦争目的で疎開してきた工場も数多くありました。それは、「工場ラッシュで、上田市は大小多くの工場の建設と従業員や物資の斡旋・調達に戦場のような騒然たる有様であった。」（上田近代史より）ようです。

空襲によって被害を受けた工場もありましたが、終戦時の設備能力は昭和 12 年の日華事変開始時よりも多かったようです。

上田市に疎開してきた工場設備は空襲によって破壊されることなく、無傷のまま戦後の経済成長へとつながっていったのです。

具体的な動きを言えば「鐘紡の工場がつくられた→その建物に三菱重工業の工作機械が収容されたが、資材、労力の不足のため生産に使われることはなかった→終戦後、その機械は無傷で元の工場へ戻された→朝鮮戦争特需に使用された→経済成長期に使われた。」もちろんそれは三菱重工業のことばかりではありません。多くの疎開工場はこのような動きをしたのである。

「戦場のような騒ぎ」の中で、上田市は苦しみましたがその働きは決して無駄ではなかったのです。その苦しみが経済成長のもとをつくったのでした。

※参考資料・文献

・上田市誌　近現代編（７）　⑳上田市民のくらしと戦争
・上田小県誌　社会編
・上田商工会議所 100 年史 P182

以下に上田へ疎開してきた主な事業所を紹介します。これらの資料は、各事業所の HP の沿革等を参照して作成したものです。

オルガン針株式会社

①沿革

1920年（大正　9 年）- 東京（現東京都荒川区）で蓄音機針の製造開始。
1936年（昭和 11 年）- 合名会社増島製針所として法人化。
1939年（昭和 14 年）- ミシン針の製造開始。「オルガン印」の商標で生産開始。
1945年（昭和 20 年）- 戦時疎開により長野県へ移転。
1950年（昭和 25 年）- 株式会社へ改組、株式会社増島製針所となる。
1963年（昭和 38 年）- オルガン針株式会社へ社名変更。
1974年（昭和 49 年）- 合弁会社として香港増島車針有限公司を設立。
1995年（平成　7 年）- ORGAN NEEDLE（VIETNAM）Co,LTD（ベトナムホーチミン市）を設立。
2002年（平成 14 年）- 重慶風琴針業有限公司（中国重慶省）を設立。
2016年（平成 28 年）- グループ再編。製造部門をオルガン製針（株）として分社。

②どこからどこに来たのか

東京都荒川区から長野県へ移転

③戦時下の製品

ミシン針

④現在の製品

ミシン針、ニット針、フェルト針、プローブ

上田日本無線株式会社

①沿革

1942年（昭和 17 年）- 日本無線株式会社上田工場の建設に先立って、上田市新参町に上田工業訓練所を開設。技能養成と無線機部品の製作を開始。

1943年（昭和 18 年）- 現在地に工場2棟を完成。主に航空無線機部品の製作を開始。その後、翌 1944 年・45 年にも新工場を建設し航空機用方位測定機、機上無線送受信機等を加え次第に増加。

1945年（昭和 20 年）- 終戦により工場を一時閉鎖

1946年（昭和 21 年）- 民需転換の許可を得て工場を再開

1949年（昭和 24 年）- 企業再建整備法および過度経済力集中排除法の適用をうけ、旧日本無線株式会社の第 2 会社として、新たに上田日本無線株式会社が、資本金 700 万円、従業員 190 名にて発足。 船舶用無線、通信機、測定器並びに無線送信機等を製作。

1979年（昭和 54 年）- 創立 30 周年にあたり、103 工場（3 階建・延 3,088㎡）を完成、増産体制確立。

1996年（平成　8 年）- 営業本部の主体を東京営業所に移動し、東京営業所を増強。同時に上田営業所開設。

1999年（平成 11 年）- 創立 50 周年。

2016年（平成 28 年）- 日本無線株式会社による完全子会社化。

②どこからどこに来たのか

日本無線株式会社上田工場の建設に先立ち、上田工業訓練所を開設本社は東京都中野区

③戦時下の製品

技能養成と主に航空無線機部品、航空機用方位測定器、機上無線用受信機等

④現在の製品

メディカル、介護製品･システム、ワイヤレス医用製品 ･システム、圧電セラミックス一覧、超音波医療用振動子･プローブ、無線通信、情報機器、無線応用機器、920MHz 帯マルチホップシステム機器

東京静電株式会社

①沿革

1919年（大正　8 年）- 佐野吉治　東京府芝区小山町に個人企業として変成器モーターの製作開始
1941年（昭和 16 年）- 芝区白金志田町に（株）精電製作所設立、新型変成器、測定機器の生産開始。資本金 18 万円
1945年（昭和 20 年）- 長野県小県郡神川村大屋に工場疎開（現上田市大屋
1946年（昭和 21 年）- 東京都武蔵野吉祥寺に東京工場解説
1952年（昭和 27 年）- 東京都港区佐久間町に販売会社、東京精電（株）設立。資本金 50 万円
1956年（昭和 31 年）- (株)精電製作所と東京精電(株)を合併し、社名を東京精電(株)とする。資本金260万円
1960年（昭和 35 年）- 大屋工場を上田市蒼久保へ移転新築し上田工場となる
1961年（昭和 36 年）- 本社を東京都港区麻布六本木に移転
1974年（昭和 49 年）- 本社を東京都杉並区宮前に移転新築
1984年（昭和 59 年）- 上田工場に電源機器生産ライン新設
2011年（平成 23 年）- 会社設立 70 周年記念式典
2019年（平成 31 年）- 創業 100 周年記念行事を上田工場にて行う。

②どこからどこに来たのか

東京都芝区（現在の東京都港区）から長野県小県郡神川村大屋（現上田市大屋）

③戦時下の製品

新型変成器、測定機器

④現在の製品

電源変圧器、電源装置、試験機器など

山洋電気

①沿革

1927年（昭和　2 年）- 山洋商会を創立、電気部品の輸入販売を開始
1932年（昭和　7 年）- 東京・豊島区西巣鴨（現・東池袋）に小型交流・直流回転機および通信機用電源の製造工場、山洋商会特殊電機製作所を開設
1942年（昭和 17 年）- 山洋電気株式会社に社名を変更同年陸軍航空本部より強力な増産命令が下され、長野県上田市に新工場（上田北工場）を建設することになる。
本社工場の拡張、製糸工場を買収して上田南工場として稼働。
1944年（昭和 19 年）- 正式に軍需会社として指定同年長野県上田市に工場を開設（上田北工場、旧緑が丘工場）
1945年（昭和 20 年）- 4月13日未明東京の本社工場が空襲を受け、降り注ぐ焼夷弾によって火災の被害が発生軍需用の無線通信機用電源の主力メーカーだったため、被害を受けながらも瞬時の生産停滞も許されず。地下工場の建設も命令されるも、完成する前に8月15日を迎えた。
1945年（昭和 20 年）- 本社・東京工場を東京都豊島区巣鴨（現・北大塚）に移転
1979年（昭和 54 年）- 長野県上田市に塩田工場を開設
1980年（昭和 55 年）- 長野県上田市に築地工場を開設
1984年（昭和 59 年）- 長野県青木村に青木工場を開設（現・ロジスティックセンター）
1990年（平成　2 年）- 長野県上田市に富士山工場を開設
1997年（平成　9 年）- 長野県上田市にテクノロジーセンターを開設
2009年（平成 21 年）- 長野県上田市に神川工場を開設
※山洋電気の歩みと技術革新（2）　戦時体制下，「軍需工場化」と増産要求への苦悩
※山洋電気の歩みと技術革新（3）　軍需会社から平和産業へ―戦後混乱期を生き抜いた「技術への信頼」より

②どこからどこに来たのか

東京都豊島区西巣鴨（現・東池袋）から長野県上田市の現・緑ヶ丘へ、その後上田市殿城など（本社は東京都豊島区南大塚）へ

③戦時下の製品

無線通信機の電源（陸軍の戦車や海軍の艦艇に搭載される）、航空機のスターターモータ

④現在の製品

電子機器の冷却用システム、金融機関オンラインシステムなどの電源バックアップ装置、医療機器などの制御サーボシステム

城南製作所

①沿革

1933年（昭和　8 年）- 東京都大田区大森に合資会社城南製作所設立無線機及び強電受配電電気器具製造始める

1944年（昭和 19 年）- 第二次大戦中、長野県上田市材木町へ疎開し製造継続

1948年（昭和 23 年）- 自動車部品製造へ業種転換

1961年（昭和 36 年）- 蒼久保工場移転

1998年（平成 10 年）- 丸子工場拡張、本社工場全面移転

②どこからどこに来たのか

東京都大田区大森から上田市材木町へ、その後上田市下丸子へ

③戦時下の製品

無線機及び強電受配電電気器具

④現在の製品

自動車の開閉機構関連（窓ガラスの昇降機、ロック機構など）

三葉製作所

①沿革

1930年（昭和　5 年）- 東京都品川区小山に株式会社三葉製作所を創業、ゴム押出成形機附属機械の製造を開始
1939年（昭和 14 年）- 海軍監督工場となり、アーク溶接機、スポット溶接機の量産に入る
1945年（昭和 20 年）- 工場及設備を戦災により焼失、直に焼跡に仮営業所を設け、工場を長野県上田市に新設、操業開始
1949年（昭和 24 年）- 東京工場再建操業開始
1960年（昭和 35 年）- 本社社屋を新築、第一期上田工場拡張
1965年（昭和 40 年）- 本社社屋及東京工場、第二期上田工場拡張
1975年（昭和 50 年）- 東京工場を上田工場に移設統合
1985年（昭和 60 年）- 上田工場増築
1989年（平成　元年）- 上田工場　管理開発棟新築、製缶工場、加工部品管理棟改築・自動倉庫棟新築、構内緑化並びに全面環境整備実施

②どこからどこに来たのか

東京都品川区小山から長野県上田市中央東（本社は東京都品川区小山）へ

③戦時下の製品

アーク溶接機、スポット溶接機

④現在の製品

ゴム・プラスチック押出機、電線被覆装置、海外他社の代理店

アート金属工業株式会社

①沿革

1917年（大正 16 年）- 榊原郁三が、東京本郷にアート商会を設立1926年（大正15年）- アルミ軽合金による
ピストンの試作に成功
1932年（昭和　7 年）- アート軽合金鋳造所を設立し、本格的にピストン製造を開始
1941年（昭和 16 年）- 営業部の一部をアートピストン株式会社として独立させ、販売会社を設立
1943年（昭和 18 年）- 長野県上田市常磐城に工場を疎開
1945年（昭和 20 年）- アート金属工業株式会社に社名変更
1980年（昭和 55 年）- 上田市山田に山田工場を新設
1993年（平成　5 年）- 上田市下之郷（リサーチパーク内）に塩田工場・研究開発センターを新設
2017年（平成 29 年）- 創業 100 周年を迎える

②どこからどこにきたのか

1917年に東京本郷で創業。1943 年に長野県上田市常磐城へ、工場を疎開。

③戦時下の製品

航空機部品（戦闘機などで使われるピストン）

④現在の製品

自動車などで使われるエンジン用ピストン

株式会社三鷹金属加工所

①沿革

1938年（昭和 13 年）- 東京都中央区日本橋蛎殻町に株式会社三鷹金属化工所を創立。三鷹市上連雀、および同市下連雀の 2 ヶ所に工場を建設し、塗装・メッキ工場を開業。

1943年（昭和 18 年）- 長野県上田市に上田工場を設立

1945年（昭和 20 年）- 終戦により一時閉鎖（8 月）。商号を変更し、株式会社三鷹工芸社として発足（9月）。防錆加工を開始する

1950年（昭和 25 年）- 深刻な金融困難を生じ事業継続不可能となり解散（11 月）。東京都杉並区高円寺に有限会社三鷹金属化工所を設立し、前記株式会社 三鷹工芸社よりメッキ設備をすべて買い受け新発足昭 1977 年（昭和 52 年）　本社を杉並区より三鷹市へ移転 。

2013年（平成 25 年）- 上田第 2 工場を設立

②どこからどこにきたのか

1938年（昭和 13 年）- 東京都中央区日本橋蛎殻町で株式会社三鷹金属化工所を創立。

1943年（昭和 18 年）- 長野県上田市に上田工場を設立。

③戦時下の製品

無線機メッキ

④現在の製品

航空機・医療機器・通信機器・重電機器などのメッキ

鐘淵紡績株式会社

①沿革

1886年（明治 19 年）- 東京の繰綿（くりわた）問屋 5 店によって東京綿商社が設立。
1887年（明治 20 年）- 東京・鐘ヶ淵（かねがふち）に紡績工場を建設。資本金 100 万円、錘数 3 万錘で出発した。
1893年（明治 26 年）- 社名を鐘淵紡績（株）に改称 。
1935年（昭和 10 年）- 上田鐘紡敷地工事に着工する。
※昭和恐慌後の不況から抜け出すため、当時の上田市は工場誘致を熱心に進めていた。
そして、鐘淵紡績株式会社の誘致に成功する。
1937年（昭和 12 年）- 上田工場での創業を開始。
※当時の工場敷地は 33 万㎡、従業員 1000 余名の大工場であった。
1943年（昭和 18 年）- 秋ごろに上田工場での生産をほとんど中止する。
2007年（平成 19 年）- 社名を「カネボウ」から「クラシエ」へ変更。

②どこからどこにきたのか

1887年に、東京・鐘ヶ淵（かねがふち）に紡績工場を建設し、1937 年から疎開工　場である上田での操業を開始した。

③戦時下の製品

生糸を使ったパラシュート

④現在の製品

鐘紡は2007年から商標をクラシエに変更し、現在の製品は、ヘアケア・スキンケア用品や化粧品、医薬品など。

三菱重工株式会社

①沿革

1884年（明治 17 年）- 政府の工部省　長崎造船局を借り受け、長崎造船所と命名して造船事業を開始。（この造船事業は、のちに三菱造船株式　会社に引き継がれ、大きく成長する）

1934年（昭和　9 年）- 造船事業の他に、重機・航空機・鉄道車両を加えて社名を三菱重工業株式会社に変更し新しいスタートをきる。

1944年（昭和 19 年）- 上田市へ工場疎開

※三菱重工業は、鐘淵紡績株式会社上田工場跡をそのまま引き継ぐ形で、上田に疎開工場を構えた。

しかし、終戦により、三菱重工業株式会社上田工場もそのまま上田に根をおろすことなく去ってしまう。その後の工場跡地は、専売公社日本たばこ産業によって受け継がれ、2005年の工場閉鎖まで続いた。現在では、そして、イトーヨーカ堂が上田市の日本たばこ産業（JT）工場跡地に、大型ショッピングセンター（SC）「アリオ上田」を開店し（2011 年から）、市民に愛される施設となっている。

②どこからどこにきたのか

1884年 - 長崎で造船事業を開始し、1944 年に上田市へ工場疎開をした。

③戦時下の製品

航空機関係

④現在の製品

三菱重工の現在の製品は、航空機や船、ロケットのエンジンや自動車の部品等。

第３部

活動を振り返って

これからの平和を築くために

社会福祉学部４年　岡田　輝

私は、昨年度からこの活動に取り組み続け、今年で２年目になります。

改めてこれまでの活動を振り返ってみると、「ヒト」から戦争体験を聞き、戦争遺跡の「モノ」から当時の状況を考え、自分の知識にしていくこと、そして知識にしたすべてをもっと若い世代に伝えていくことの大切さを何度も感じることができました。

今年度は、「疎開」がテーマということもあり、多くの方々から疎開先の生活や当時の衣食住、今のお考えについてお聴きすることができました。お話をお聴きする中で、多くの方々がつらい過去を持ち、戦時下の話をタブーとしている状況がありました。そのような中で、私たちのような若者に伝えたい、語り継ぎたいという強い気持ちが伝わってきました。

今現在、ロシアとウクライナやイスラエルとパレスチナの問題など、世界各地では、今もなお、戦争が続いている状況があります。平和を掲げる日本が戦争に巻き込まれないという確証はどこにもありません。

ひどく辛い戦争を二度と繰り返さないためには、これからの未来を担う若者の活動や意識が必要不可欠です。

私たちの行うこの活動に決して終わりはありません。私は､今年で大学を卒業します。しかし、来年度以降も戦争について学び続け、次世代に語り継ぐ責任があると考えています。

この活動を行う中で、多くの人と出会い、たくさんの協力をしていただきました。

この活動は、１人だけでやろうと思っていてもできないものです。この活動に共感し、協力してくださる方々、そしてこの活動に興味を持ち、聞く耳を持とうとしてくれる若い世代。この繋がりが今後の平和を築くためには、必要だと考えています。

次世代に語り継ぐためには、体験された方々から生の声を聴き、聞き手の私たちが自分事として捉えることが大切です。そして、それらをもっと若い世代に伝えていかなければなりません。

私たちひとりひとりの力では、決して戦争を無くすことはできません。だからこそ、誰しもが戦争に興味関心を持ち続けることが必要です。たとえそれが、小さな力でも一つになれば、大きな力になります。

真の平和な世界を築くためにも、戦争や平和、命の尊さなど、まずは知ることを通して、学び、考え、伝えていくことが必要になってきます。

今できることは何か。

過去、現在、そして未来の世界と向き合い続け、次世代に語り継ぐことを通して、私たち全員の手で平和な世の中を作っていくことではないかと考えます。

一年間の活動を振り返って

社会福祉学部４年　高田　一吹

当時を体験した方々から戦争について聞き取りをしたり、上田地域に残る戦跡を巡る一年の活動を通して、改めて戦争の凄惨さと平和の尊さについて考える事が出来ました。今年はそれらの活動に加え、上田地域にやってきたヒト・企業の疎開についても調査を進めていきました。お話してくださった方の中には疎開先で中傷にあったため、その後地域に対する強い悪印象を抱いた方がいました。また、疎開先で流行病に感染して家族を亡くした方もいました。一度戦争を始めると安全な場所など無くなり、そこで犠牲になるのは常に罪のない市井の人々である事を強く実感しました。翻って、疎開先では地域住民との穏やかな生活を営まれていた方もおり、今まで抱いていた疎開のイメージを覆すようなお話も聞けました。この事から。体験した人の数だけ“疎開”や“戦争”はあるのだと感じました。

また、私は前年度も山浦ゼミで活動していたため、去年聞き取った内容や調査した事柄を他者に伝える機会が何度かありました。他者に対して伝えようと学んだ事を自分の言葉で捉え直すと、語ってくださった方々の伝える戦争の凄惨さや命の尊さなどがより具体性を持って感じられたように思います。また、中学生や高校生などが聞いてくださる場面もあったのですが、そこで年齢の近い自分達が語ることによって響き方が異なる事に気づき、改めて若い世代が戦争について語りつぐことの重要性と意味について考える事が出来ました。実際に戦争を体験した方々が減りつつある今だからこそ、風化させないように記録し、後の世代に伝えていく事が求められているのかなと感じました。

世界情勢を見ると、“戦争”という概念が数年前よりも近くに感じられるような状況になっています。私はそのような情勢を見るたびに、予兆こそあるものの、戦争は突然起こり、どこでも戦地になり得る可能性があることを強く感じます。だからこそ、私たちは常に戦争のもたらす悲惨さや凄惨さに目を向け続け、その選択肢をとらないように注意し続ける必要があるのではないでしょうか。私自身も、今年一年間で学んだ事柄を自分の中に落とし込み、戦争という脅威を決して他人事にしないように考え続けたいと思います。

語り継ぐ責任

社会福祉学部４年　柳沢　駿太

今年のゼミ活動を通して、戦争という悲惨な出来事に対する強い関心と、戦争を体験することがなかった人たちが真剣に考え、理解していくべきだという責任感が育まれました。山浦先生のゼミに参加する動機となったのは、ロシアによるウクライナ侵攻という衝撃的な出来事でした。ミサイルや爆撃機によって荒廃した町、被害に怯え泣き叫ぶ子どもたちの姿にメディアを通して触れ、過去に起こった日本の戦争の現実を直視する必要性を感じました。

今年、私たちは太平洋戦争中に起こった出来事の中で「疎開」に焦点を当て、多くの方のご協力を得ながら、聞き取り調査などのゼミ活動を展開してきました。皆さんは「疎開」という言葉を聞いてどのようなイメージを抱くでしょうか。聞き取りなどを行う前の私にとって、「疎開」に関するイメージは「安全」でした。「疎開」によって戦争の被害から逃れることができたのではないかと、私は思っていました。しかし、聞き取り調査などのゼミ活動を通じて、「疎開」の言葉の意味だけでなく、その実態についての理解が不十分であったことに気づきました。具体的な事例として、「食糧難」、「疎開児童に対するいじめが行われていた」、「疎開先に指定された場所がマラリアの流行地になっていた」ことなどを聞き取りました。私自身、「疎開」という言葉の裏に潜む困難や苦労についての理解が及んでいませんでした。実際には、疎開によって多くの人々が過酷な環境に追いやられていたのです。「疎開」も紛れもない戦争による被害の一つではないかと考えました。

国際情勢を鑑みると、将来的に日本が戦争を免れるとは言い切れません。今に始まったことではないのかも知れませんが、「対話」ではなく「武力」が勝る世界に向かって行っているのではないかと感じます。長野大学がある上田市にも東京などから多くの学童が疎開をしたという記録が残っています。長野県には戦争による直接の被害が少なくても、戦争の傷跡があります。この冊子を手に取ったあなただからこそ伝えられる「言葉」を身の周りの方々に紡いでいってほしいと思います。また、沖縄の学生が「今を生きている私たちが戦争体験者から直接お話を聞ける最後の世代」だと述べていました。争いが再び我が国で勃発しないように、微力ながら私も戦争の記憶や体験者の想いを風化させずに、これを次代に語り継いでいくことを心に誓いました。

過去から学ぶ、現代を考える、未来へ継ぐ

社会福祉学部４年　小谷　健人

私は以前より、個人的な興味関心から、太平洋戦争などについての情報を収集していたことがありました。ですが、「戦争」そのものについては、「昔起きたこと」や「どこか知らない遠いところで起きていること」などというように、自分とは関係のないものであるというように考えてしまっていました。しかし、この専門ゼミナールの活動に参加し、地域の身近な所にある戦争関連の遺構に実際に訪れて五感で感じたり、戦争当時の生活や疎開を経験された方々から貴重なお話を伺ったり、工場の疎開と現在とのつながりなどについて調査したりする中で、「また同じことがいつ起きてもおかしくはない」や「身近で誰でもどこでも起こりうることだ」などというように、「戦争」というものについての認識を改めることが出来ました。

2022年２月にロシアがウクライナへの侵攻を開始しましたが、この文章の執筆時点では未だに戦争の終わりが見えない状態が続いています。さらに、2023年９月末にはアルメニアとアゼルバイジャンとの間でナゴルノ・カラバフ地域をめぐる紛争が再び激化し、一旦は終結したものの土地を追われた難民が大量に発生しています。そして、10月からは、イスラム組織のハマスがイスラエルを奇襲したのを受け、イスラエル側はパレスチナ自治区のガザ地域に侵攻を開始しました。その他にも対立している国や地域は数多くありますし、日本でも近隣他国との領土問題や軍事行動の脅威の問題などがあります。それらの問題について私たち一人一人が考える必要があり、その際には過去に実際に起きた戦争に関連する知見や情報を得ておく必要があるのではないか、と私は考えます。

そして、過去に起きたことは、未来でも起こりうることである、とも私は考えます。もしも再び戦争が起きてしまうことになっても。その日に備えるために。その日が来ないように。太平洋戦争当時に何が起きたのかを知り、私たち一人一人に何ができるのかを考える必要がある、と私は思います。そのためにも、当時を体験された方々からのメッセージを周囲の人や未来へと語り継いでいくことが、何よりも重要なのではないか、と私は考えます。もしこの冊子を手に取っていただいた皆さんが、今回取り上げた内容以外のことについての情報も入手し、ご自身ができることを考え、周りの人々や未来の人々へと語り継いでいただける一助になれましたら、幸いでございます。

戦争を身近に感じた１年間

社会福祉学部３年　上野　未来

私は、中学時代に平和学習で広島県に行き、被爆体験者の方々から戦争当時のお話を聞く機会がありました。そのとき、本当に戦争を経験した方からの言葉を初めて聞き、どんな記事やテレビよりも重く心に残りました。大学生になった今、もう一度戦争について学びたいと思い、山浦ゼミに入りました。

今まで、日本での戦争は過去のこと、広島県や長崎県、沖縄県で被害があったという認識を持っていました。しかし一年間山浦ゼミで上田市の戦争について学び、戦時下の日本では日本全体、国民全員が戦争の被害者であったという認識を持つようになりました。

また、現在まで残る戦争遺跡からは過去のこととして目を伏せていてよいものではないと強く思うようになりました。それが大きな心境の変化です。

活動の前半では上田市内にのこる戦争遺跡を実際に見に行かせていただきました。事前学習として写真を見たり情報を得てから臨みましたが、実際に足を運んで自分の目で見たとき、戦争がよりリアルに感じました。数十年前にこの場所で戦争に苦しむ人々がいたことを肌で感じました。

後半では当時疎開の経験をした方を中心に聞き取り調査を行いました。疎開について今まで習ったことはありましたが、安全なものであると思っていました。疎開をして空襲は逃れることはできても、物資不足で苦しんだり、周囲との人間関係で悩んだりと、一概に、疎開はよいことであるとは言えないものであると理解しました。私たちに当時の辛い経験を語ってくださった方々は、辛い経験であったと思いますが、私たちの世代に伝えることが必要だと感じて話してくださったのだと思います。語ってくださった方の熱量までも伝えられるようになりたいです。

山浦ゼミに入らなければ、戦争を他人事のように感じ、自分の住んでいる地域の戦争の歴史について知ることはなかったと思います。今まで戦争が他人事であったこと、知らなかったことが少し怖くも感じました。１年間を通して、自分の住んでいる地域でも戦争があったこと、日本は戦争を経験した国であることをリアルに実感できた活動で、貴重な学びとなりました。今後も１年間学んだことを心に刻み、身近な人から伝えていきたいです。

私たちの責任

社会福祉学部３年　伊藤　果穂

終戦から78年が過ぎ、戦争の記憶は私たちの中から消えつつあります。実際に戦争を経験された方と出会うことが難しくなっていく中で、どうやって人々の心の中に戦争の歴史を残しておくかということは、とても重要なテーマではないでしょうか。

特に、若者世代になればなるほど、戦争というものは遠い昔の出来事のように感じやすく、興味をもってもらいにくいという現実があると思います。正直私も、この活動に参加するまでは、戦争をどこか他人事のように捉えていました。世界では､現在も争いが起きているにも関わらず、それを自分事として考えるのは簡単ではありません。

しかし、ゼミの活動を通して、上田市に残る戦争の痕跡を調査したり、戦争体験者の方へヒアリングを行ったりしたことで、戦争に対する見方・考え方に変化が生まれました。上田市に20年間住んでいても知らなかった、戦争遺跡を訪れるたびにとても驚き、死が隣り合わせの時代を生きた方のお話を聴くたびに、心が動かされました。

私たちが普段何気なく過ごしている日々の中には、戦争の歴史を若者に伝えたいと願っている「モノ」・「ヒト」が存在しています。それに気づいたことで、私は今までよりもずっと、戦争をリアルに、身近に感じられるようになりました。

また、今年は「疎開」をテーマに学生が主体となって調査を行いました。私は工場疎開について調べましたが、戦争による影響を受けて出来上がった産業があるという点はとても興味深いと感じます。他にも、長野県は全国的に学童疎開の受け入れ県として有名で、感謝の石碑が今も町に残っているという事実は、とても印象的です。

最後に、この冊子を手に取っていただいた方にお伝えしたいことがあります。私たちは、戦争と自分の生活を切り離して考えがちですが、戦争は常に平和な日常のすぐ側にあります。身の回りにある戦争の記憶と痕跡を受け継ぎ、それを次世代に繋げていくことは、私たちにしかできません。もう二度と戦争を繰り返さない為に、戦争を知り、未来に伝えていくことこそが、若者の果たすべき責任ではないでしょうか。

《 編 集 後 記 》

猛威を振るった新型コロナウイルスも５類感染症となり、外出制限などが緩和されてきました。このような中で、多くの皆様のご協力やご支援、励ましのお言葉をいただきました。関係したすべての皆様に心より感謝申し上げます。

去年から引き続き、本ゼミでは戦時下における非日常の日常についてフィールドワークやヒアリングを実施してきました。

さらに、今年度のテーマである「疎開」について、上田市における学童疎開や企業疎開を中心にヒアリングや文献調査を行ってきました。

ヒアリングを行う中で、感じたこととして、終戦から78年たった今でも、まるで昨日のことのように戦時下の出来事を鮮明に記憶していらっしゃることに驚きました。それと同時に、ヒアリングをさせていただいた皆様の「話したい、伝えたい」という気持ちの強さに圧倒されました。この思いを胸に、私たちの中でも改めてこの活動を行っていく意義を感じることができました。

この活動を行う中で、人と人の繋がりの温かさというものを感じる場面が本当にたくさんありました。皆様の協力があったからこそ、私たちの活動は次第に大きなものとなり、多くの人の目に止まるものとなりました。

今後、このような形で若者が直接、戦争体験者のお話を聞く場面は少なくなっていきます。だからこそ、今回を機に協力してくださった皆様に改めて感謝を申し上げます。

「知る」「語り継ぐ」「保存する」の３つの視点を持った活動には終わりはありません。誰しもが興味関心を持ち、学び続ける意欲がこれからの未来には必要です。

皆様には変わらぬご支援ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

最後になりましたが、本書の刊行にお力添えいただきました、方々には多大なるご支援をいただきました。

ここにスタッフ一同心より御礼と感謝を申し上げます。

2023年12月

長野大学社会福祉学部　山浦ゼミ

○岡田　輝	社会福祉学部	４年
高田　一吹	同	４年
小谷　健人	同	４年
柳沢　駿太	同	４年
伊藤　果穂	同	３年
上野　未来	同	３年

監修　長野大学　副学長　社会福祉学部専門ゼミ　山浦　和彦

記録集作成 | 長野大学地域づくり総合センター「信州上田学」2023 年度事業
「若者たちへの伝言」プロジェクト

監　　修 | 長野大学副学長 山浦和彦

取　　材 | 長野大学山浦ゼミ学生

協　　力 | 上田市教育委員会

発　　行 | 2024 年 1 月

長野大学 HP 信州上田学サイト

みんなでつくる信州上田デジタルマップ
（信州上田学の情報発信のツール）

公立大学法人
長野大学
NAGANO UNIVERSITY